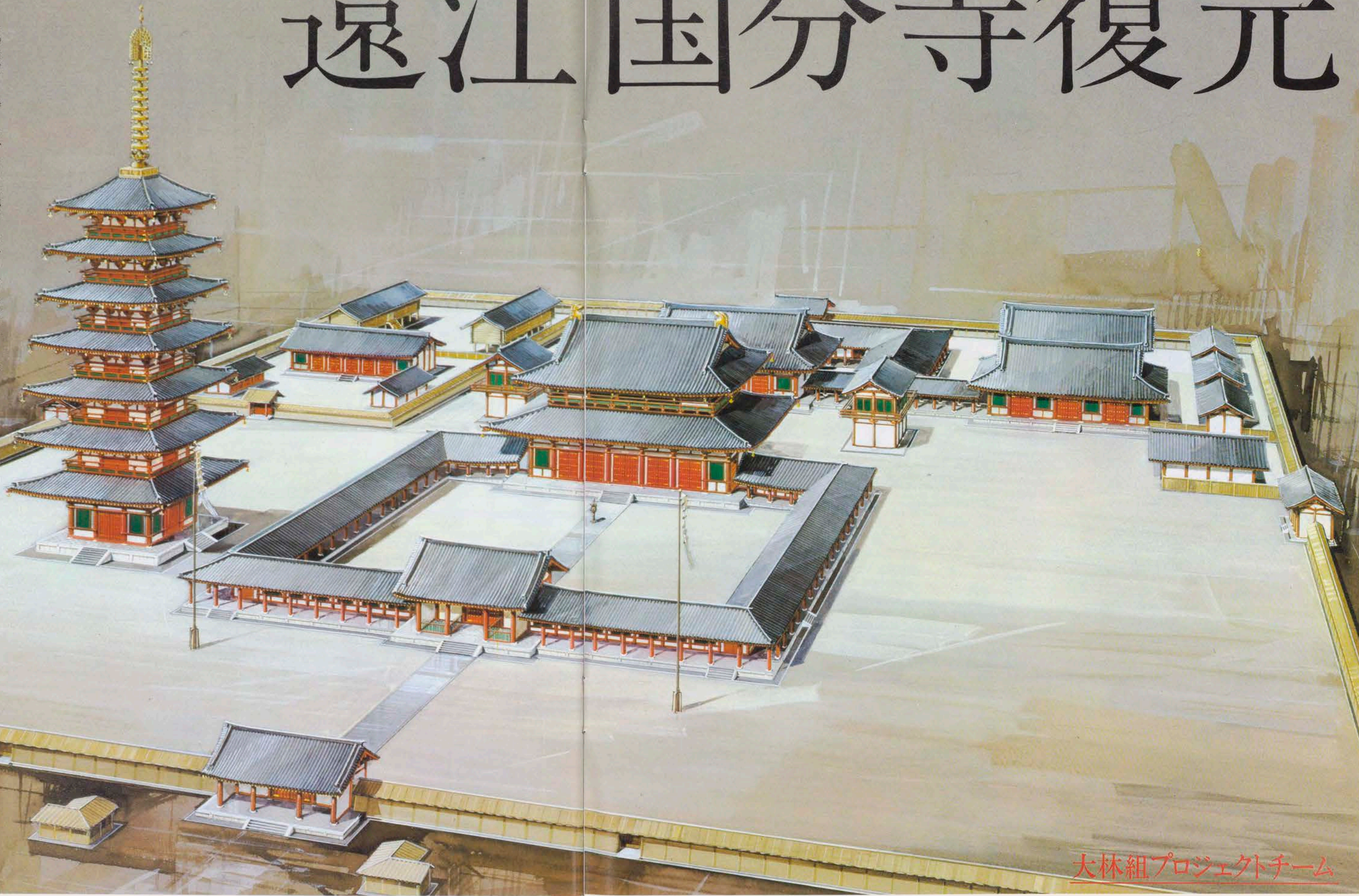


遠江国分寺復元

「国分寺」その名は「いまも寺」として、あるいは地名として、われわれ現代人とも決して遠い存在ではない。聖武天皇の天平の昔、木造建築としては最大級といえる六十餘もの七重の塔を建て、一大伽藍を誇ったであろう往時の国分寺の姿は、われわれの想像をはるかに超えるものがあったに違いない。律令国家建設の過程において、国分寺は宗教的意味に留まらず、中央思想を伝える国家事業としての色彩を強く宿していた。そこに、様式の定量化ともいえる、マニュアル建築の原型的な考え方を反映していたといわれる由縁もある。いま国分寺は、各地にわずかな遺構を見るに過ぎないが、大林組プロジェクトチームは、遺構中とりわけ発掘状況が良く、また建築当時、東大寺式の最新伽藍を有したといわれる遠江国分寺に注目し、歴史の中に往古の国分寺像を追い求めた。



大林組プロジェクトチーム

一、国分寺建立の背景

聖武天皇の伊勢行幸

七四〇年（天平十二年）十月二十六日のことである。折りから大宰小式藤原広嗣が九州大宰府に反乱の兵を挙げ、都へと上がろうとする中、時の帝聖武天皇は不意に平城京を捨て、後世に「不可解な御幸」ともいわれる伊勢行幸をおこなった。

「朕意うところあるによって、今月末暫く関東に往かんとす。その時に非ずといえども、こと已むことあたわず。」

こうして聖武天皇は、反乱征討軍の将軍大野朝臣東人宛に一文を送ると、右大臣橘諸兄を伴い、伊勢路をたどり、やがて遠く美濃、近江までも行幸とも彷徨ともつかない旅を続け、十二月半ば、ようやく山背国恭仁郷へと着いたのである。直ちに恭仁京遷都がおこなわれ、都の造営が始まったが、あくる天平十三年三月、この地から諸国に向けて発せられたのが「国分寺創建の詔」であった。

『続日本紀』巻第十四に、

「この頃年穀豊かならず、疫癘頻りに至る。懸懼交々集りて、唯り勞して己を罪す。是を以て広く蒼生のために遍く景福を求む。（中略）宜しく天下の諸国をして各々敬んで七重の塔一区を造り、ならびに金光明最勝王經、妙法蓮華經各一部を写さしむべし（後略）」

とある。

聖武天皇はこの詔の中で、七重の塔に主眼を置いた金光明四天王護国之寺（国分僧寺）と、法華滅罪之寺（国分尼寺）の二寺の名を正式に定め、国家鎮護を目的とした寺院建立を広く諸国へ命じたのである。その動機について、当時、飢饉と疫病の流行がうち続き、また藤原広嗣の乱による政情不安から一層悩みを深くした聖武天皇が、仏の加護による安寧を求めておこなったものであると歴史書の多くは時代背景を説いている。また、天然痘の流行により一気に壊滅に瀕した藤原一族の余命を支えるため、光明皇后（藤原不比等の娘）が仏教を奉じて、亡父不比等の封戸三千戸を国分寺に施入した結果である、と後宮政治説の立場からの解釈もある。

あるいは、律令国家建設の大きな柱として、国分寺建立の思想はすでに百年も前からあった、と説く歴史家もいる。諸国国分寺建立の詔へと至る歴史には、寺院建築の意味の変遷とも相まって、まだ定かにされていない部分が多くある。

国分寺思想の原型

聖武天皇の詔に先立つこと三百年、宣化天皇代の五三八年（一説に五五二年）、百濟からはじめて仏教が日本へと伝えられたといわれる。だがしばらくは崇仏派と乗仏派による対立の時代が続いた。やがて聖徳太子の出現によって、ようやく仏教が広く受容されるようになったのは、五百年代も末近くのことであった。

その後、大化改新の詔（六四六年）により、諸国に国司が派遣され国府の設営がおこなわれたが、この時、国府に近接して寺院（国府寺）の建立もおこなわれ、これを国分寺の前身と見られることもできる。律令国家建設への船出ともいえるこの時代、地方における寺院の建立は、地方在来の国造氏族と中央派遣の国司との間の勢力緩和策であったともいわれるが、国府寺の詳細はあまり知られてはいない。

六六三年の白村江の戦いに敗れ朝鮮半島における足掛かりを失った日本は、壬申の乱を経て、やがて内政充実の方向へと向かっていった。その推進者である天武天皇代の六七六年、全国に使者を遣わして「金光明経」「仁王経」を講読させたのである。その背景には、国分寺的な寺院の存在をどうかがい知ることができ、また天武天皇は諸寺の食封を検査し、僧の位階を定め、寺院の充実を図りながら、国家鎮護や教育の場としての寺院像を期待したのである。のちの国分寺思想の原型がこの時期にあるといわれる由縁でもある。

続く持統天皇代には全国の寺院数も五百四十五を数え、六九四年には、藤原京遷都を前に、「金光明経」百部を諸国に置き、毎年正月上弦の日に読経を命じたこと。また文武天皇代の七〇二年、諸国に国師（僧官）を任じたことなどから見ても、政教一致の政策は順調に実りを見せていたといえるだろう。しかし、その直後にはじまる凶作と飢饉、そして疫病の流行は世情を一変させた。

金堂



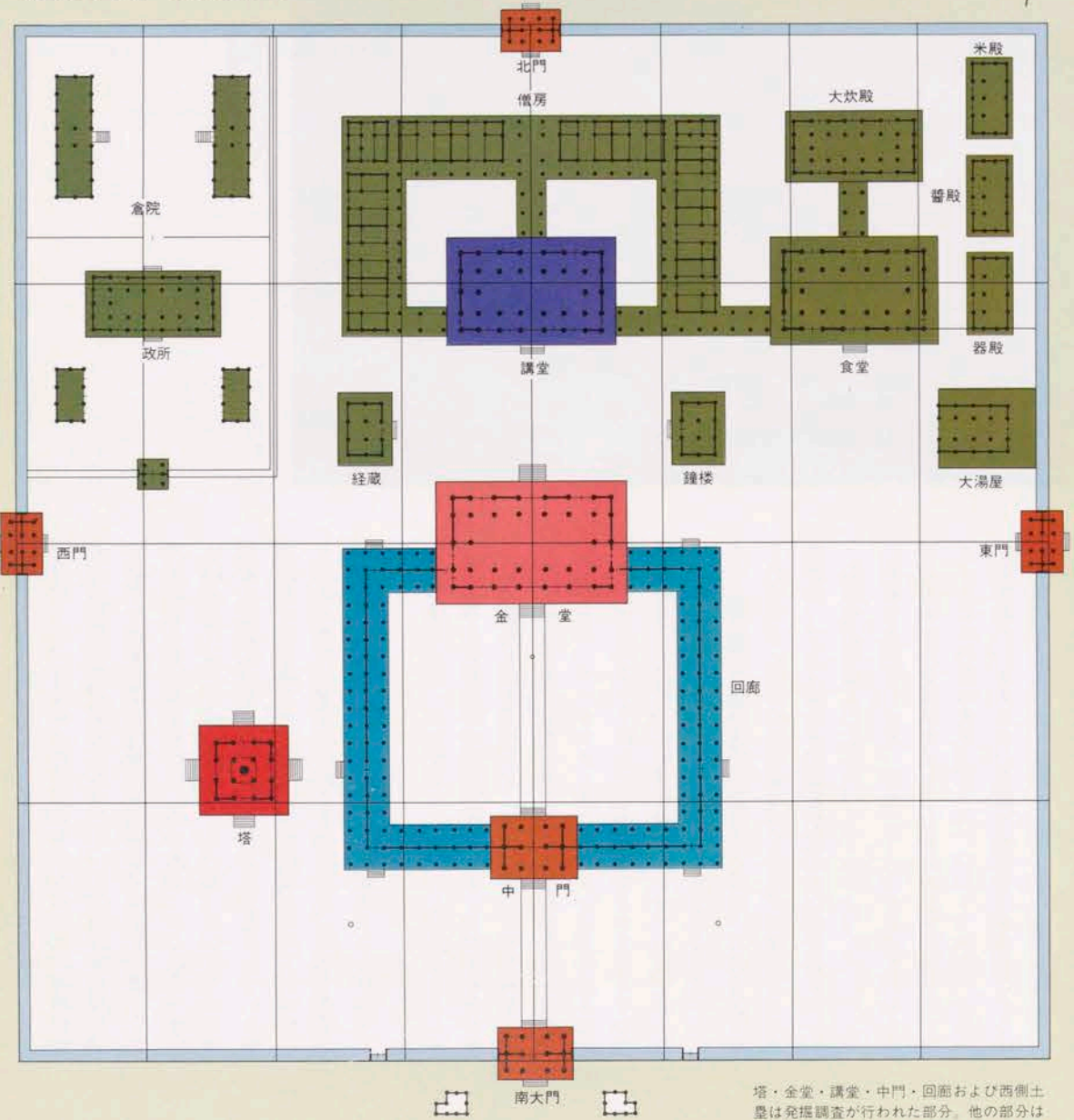
文武天皇代の七〇三年に端を発した凶作は、続く疫病の流行と相まって治まるところを知らず、諸国に飢餓と疫疾を蔓延させた。そんな状況の中でおこなわれた元明天皇の平城京遷都（七一〇年）は、造都にかり出された民衆の多くが帰郷の途に餓死するという悲惨な結果を生んだのである。

諸国寺院の荒廃と国分寺建立

一方、凶作による農民の離散によって、寺院は経済基盤を失い始めた。本来の機能を果たせずに形骸化が進行し、巷間に幻術、妖術と呼ばれる説教が流行した。農民は、無断で僧となり、僧は戒律を練らずに乞食となった。特に地方寺院の荒廃は目を覆うばかりであり、元正天皇はたびたび巡察使を派遣して諸寺の状態を調査し、荒廃した寺院の併合をおこなったのである。

聖武天皇の即位（七二四年）は、政教一致による律令

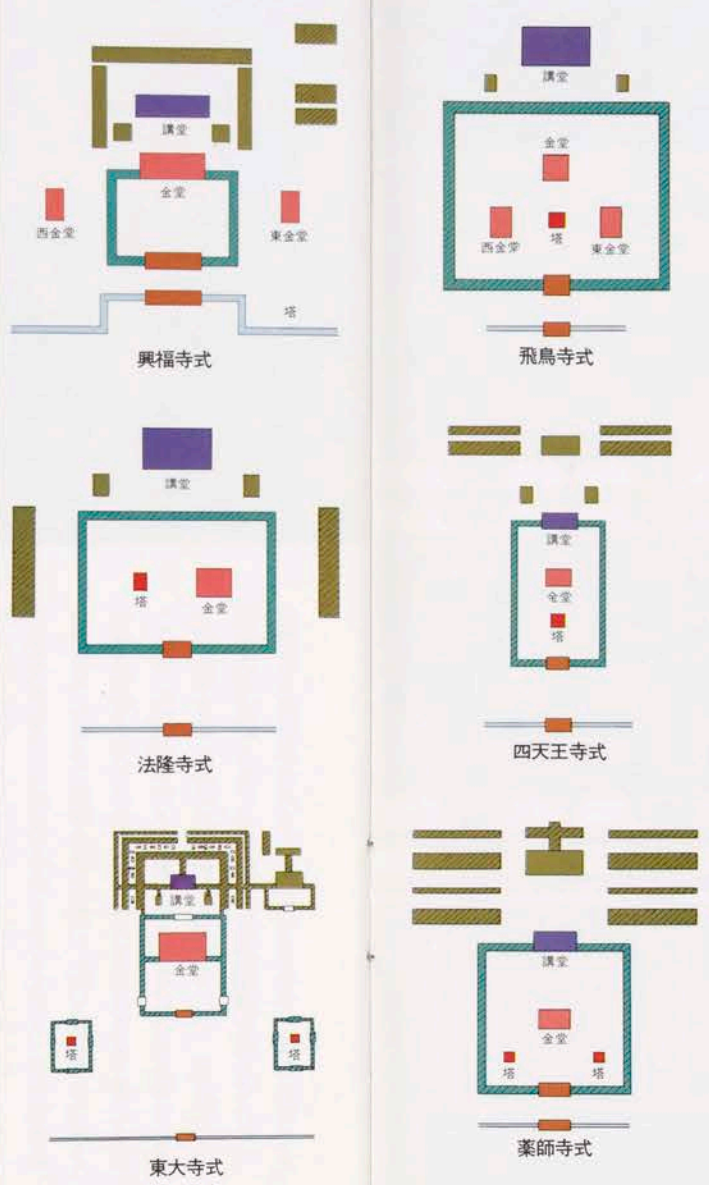
遠江国分寺配置図



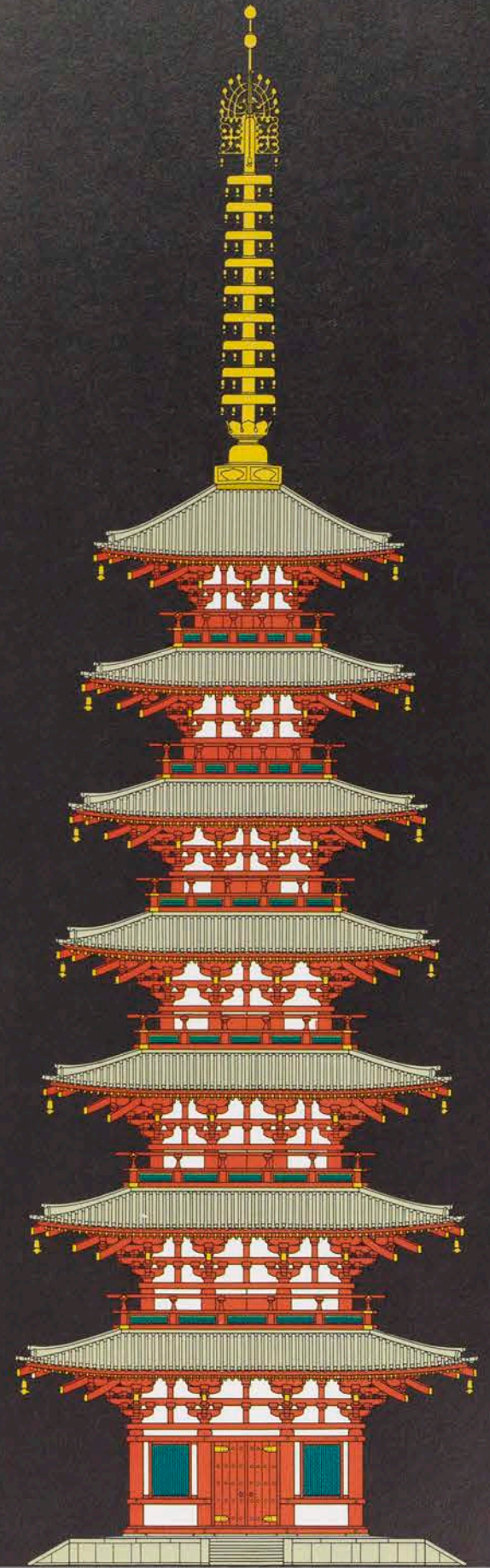
塔・金堂・講堂・中門・回廊および西側土塁は発掘調査が行われた部分。他の部分は未調査により、推定したものである。

0 10 20 30 40 50M

飛鳥期から天平期の主な伽藍配置



塔



0 1 2 3 4 5 10M

国家構想がわずか二十年にわたる天災によって、危機に瀕した、そんな時代状況の中でおこなわれたのである。即位と同時に、聖武天皇は仏教界の立て直しを図った。僧尼の名籍を調査し、仏典の読誦により除災と国家鎮護を頼りに祈らせたのである。七二八年には「金光明最勝王経」の新訳六百四十巻を、諸国に十巻ずつ分ち与え、国家平安を祈願した。これがのちの国分寺の聖典となったのである。

『続日本紀』によると、国分寺創建の詔よりも以前に、「国毎に釈迦仏の像一軀、挾侍菩薩二軀を造り、兼て大般若經一部を写さしめよ」（七二七年三月）

「天下の諸国をして国毎に法華經十部を写し、ならびに七重の塔を建てしむ」（七四〇年六月）

と、二度にわたり、諸国国分寺の存在を思わせる聖武天皇の詔が発せられている。また、七四二年（国分寺創建の詔の年）の正月に、光明皇后は亡父藤原不比等の食封五千戸を朝廷に返上し、その内の三千戸分が「国分寺」に施入されたとはじめて「国分寺」の名が見えているのである。こうしたことから、同年三月の聖武天皇による「国分寺創建の詔」は、永年にわたる国分寺構想の集大成であったといえるだろう。

この詔の内容は、従来になく具体的にあり、詳細にわたっている。七重の塔の建立や、僧寺と尼寺の正式名称「金光明四天王護国寺、法華滅罪之寺」の規定は言うに及ばず、僧寺には封戸五十戸、水田十町を施し、二十人の僧を置き、尼寺には水田十町を与え、十人の尼僧を置くこと。またその立地条件も定め、国司には尼僧たちの行いを監視するように命じてさえているのである。

歴史はいま、国分寺建立の背景をさまざまに語りかけてくるが、この詔の厳格ともいえる内容は、寺院の荒廃と人心の疲弊を目のあたりにした聖武天皇の、願いの一端を表わしているということができるだろう。

二、復元寺院の選定

大林組プロジェクトチームによる今回の復元作業は、まず第一に、諸国六十四カ所に建立されたといわれる国分寺の中から、もっとも復元に相応しい寺院を選び出す

国分寺の典型的なイメージを知ることができる。

以上の三点が主なものである。こうしてプロジェクトチームは、近江国分寺の現地調査の際に抱いた復元への思いを、遠江国分寺へとかたむけたのである。

三、創建と沿革

遠江の名は、近江が都に近く琵琶湖をひかえた地であるのに対し、遠く浜名湖をひかえた地として名付けられたといわれている。その浜名湖の東方、天竜川の豊かな流れの東側に広がる磐田原台地の南端に、遠江国分寺は建立された。現在の地名は、磐田市中央町である。

その創建がいつであったかについては、ほかの多くの国分寺と同様に、正確なことは分かっていない。聖武天皇の詔に於いて、天平九年頃から釈迦仏を安置し経典を写す寺院としての準備が進められ、天平十三年の「国分寺創建の詔」の前後には完成していた、との推察が一般的になされている。また、国分寺建立の現地責任者が国司であることから、当時の遠江国司であった桜井王が、実際の推進者であったであろう、との説もある。

八百年代始めに、奈良薬師寺の僧景戒が編集した仏教説話集「日本霊異記」には、その中巻第三十二に、「塔を建てんと願を發し、時に生める女子、舍利を捲りて産まるる縁」と題された一寺院の塔にまつわる説話がある。

遠江の国磐田郡に、かねてより塔を建てたいと願っていた丹生の直弟上という者がいた。聖武天皇の時世、弟上が七十歳の時に娘がひとり授かったが、その子は左手を握りしめたまま生まれてきて、決して開こうとはしなかった。

やがてその娘が七歳となったある日、初めて左手を開いてみせたところ、掌に舍利（仏の遺骨）が一粒あった。その噂はすぐに広まり、「国の司郡の卿、ことごとく喜び、知識を引率し、七重の塔を建て、かの舍利を安みし、もちて供養し了る」

と書き残されている。その内容から、遠江国分寺もしくはその前身の寺の、塔にまつわる縁起であることが分かる。説話の内容は、歴史的な事実とはまた別のものである。



右——現遠江国分寺址全景
左——遠江国分寺塔心礎石

（写真・中川道夫）

ことであった。

当初、第一の候補は近江国分寺であり、その前身が聖武天皇遷都の紫香樂宮であったという伝聞の歴史性と、現存する遺構の保存状態の良さから、復元を前提とする現地調査と資料調査を行ったのである。その結果、建立当時の近江国分寺の所在地がどこであったかについては、実はまだ定説がなく、現在ももっとも有力視されている甲賀郡の甲賀寺跡（元紫香樂宮II現地調査場所）のほか、大津市の瀬田川東岸に位置する瀬田廢寺、同じく西岸の国分廢寺と、計三カ所もの有力な説があることが判明した。

また甲賀寺跡の伽藍配置は、一般的な国分寺とくらべて、塔やその周囲の回廊が特殊であることなども分かり、ついに復元を断念。しかし、近江国分寺の現地調査によって、甲賀寺跡に整然と並ぶ礎石の遺構を目のあたりにしたことは、プロジェクトチームのメンバーに計り知れない情熱を与えてくれた。この遺構によって、天平の昔、七重の塔を中心に燦然と熒の波を輝かせていたであろう国分寺の姿と、そのスケールを肌で感じる事ができたのである。国分寺の選定作業は、その後、仏教考古学などの専門家の方々の意見を参考としながら検討を重ね、最終的には遠江国分寺の復元が決定したのである。

その選定理由として、

- ①国分寺遺構としては、昭和二十六年に日本で最初ともいえる本格的発掘調査がおこなわれた記念的国分寺であり、その後の保存状況もよい。
- ②飛鳥期に始まる日本の寺院建築は、塔を中心に三つの金堂を持つ飛鳥寺式を最初として、その後、四天王寺式（南門、中門、塔、金堂、講堂が一直線上にある）、法隆寺式（回廊の中に塔と金堂が並列に置かれ、講堂が外にある）、興福寺式（回廊が中門と金堂を結び、塔や東西の金堂は外にある）、薬師寺式（回廊が中門と講堂を結び、その中に金堂と二つの塔がシンメトリーに並ぶ）、そして東大寺式（回廊が中門と金堂を結び、塔は外にある）などと、天平までの期間に多彩な変遷をみたが、遠江国分寺は東大寺式であり、当時最新の伽藍配置を有していた。
- ③聖武天皇の詔にある立地条件などをよく満たしており、

るが、ここに見られるように、七重の塔一基の造営にも、国司や郡の役人を筆頭にして大勢の民衆が動員されたことは間違いない。

当時の寺院建築は、大陸から導入された全く新しい木造建築技術を駆使しておこなわれたのである。掘立小屋に住み、瓦びとつ知らない民衆に、国分寺の建立がどんな印象を与えたのか、察することすら難しいものがある。けれども、天竜川の沖積平野をのぞみ、ささぎるもの一つなく遠く海さえも一望にできたであろう磐田原台地南端の景勝地に、六十戸を越えて聳え立つ七重の塔を見た者の驚きは、現在のわれわれが超高層ビルを前にするよりも、はるかに大きな衝撃であったはずである。七重の塔は、おそらく朝な夕な、その威容を人々の目に深く刻みつけたことであろう。

『類聚国史』によれば、弘仁十年（八一九年）遠江国分寺は焼失したとある。その後、遠江国分寺に関する文献はほとんど無く、再建がおこなわれたかどうか不明ではあるが、鎌倉時代中期に阿仏尼が著した「十六夜日記」の十一「天竜の渡り」には、この辺りの里が恐ろしいほどに荒廃していた様子が描かれている。おそらく、ほかの国分寺と同様に、平安中期以降は顧みられることもなく、小規模に維持されていたのであろう。寛政二年（一七九〇年）、寺社奉行へ提出された古図では、まだ仮本堂（一間四方、庫裡、地藏堂などがあったことが知られるが、やがて明治初年の廃仏毀釈政策により、無住廢寺となったものである。

四、伽藍を起す（復元）

遠江国分寺遺跡の発掘は、昭和二十六年、元奈良国立博物館館長の故石田茂作博士を中心としておこなわれた。初期の本格的な国分寺発掘調査であった。

現在残っている関係資料は、ほとんどがこの時の調査により判明したものであり、復元にあたって、プロジェクトチームも同調査の数値を基礎資料とした。但し、判明している数値の大半は平面上のものであり、また伽藍の細部の意匠などについても解明されていない部分が多々あった。そこで今回の復元は、昭和二十六年当

時の調査により判明している平面上の数値を基礎として、天平期の古代寺院を参考としながら各堂塔の立像を求め、最終的には遠江国分寺全体の鳥瞰図を描くことを主眼としたものである。

遠江国分寺は、寺域六百尺（約百八十丈）四方を有する東大寺式伽藍配置の寺院である。国分寺の規模としては、常陸・信濃・伯耆などと同級で、中堅クラスといえる。また、金堂基壇における矩形の比率が、 $1:1.05:0.9$ （黄金分割比）に近いものであり、ギリシアから唐を経てわが国に伝わったといわれる黄金矩形が、すでに使われているのである。国分寺とはいえ、地方の一寺院に過ぎないと思われた遠江国分寺に、こうした当時最新の技法が随所に用いられていることは、プロジェクトチームのメンバーにとっても一つの新鮮な驚きであった。

たとえば金堂の中心は、南大門、北方土壘、西方土壘、東海道の道路心（寺域の東境界）まで、それぞれ五十間の距離であり、つまり寺域のちょうど中心と合致している。また、金堂基壇における矩形の比率が、 $1:1.05:0.9$ （黄金分割比）に近いものであり、ギリシアから唐を経てわが国に伝わったといわれる黄金矩形が、すでに使われているのである。国分寺とはいえ、地方の一寺院に過ぎないと思われた遠江国分寺に、こうした当時最新の技法が随所に用いられていることは、プロジェクトチームのメンバーにとっても一つの新鮮な驚きであった。

塔

遠江国分寺のシンボルともいえる七重の塔については、昭和二十六年の発掘調査により回廊の西側に塔址が発見され、その基壇は五十二尺（十五・四丈）四方、塔は最下層の一辺長三十二尺（九・五丈）の正方形であり、塔心柱径は五尺六寸（一・七丈）と判明している。復元に当たってはこの数値を参考としながら、同時に、現存する奈良期製作の唯一の模型（十分の一）である元興寺極楽坊五重小塔と、海竜王寺五重小塔の取材調査をおこなった。

各層は、上層となるにつれ柱間一辺長寸法、階高寸法、及び軒先出寸法が縮少され、また心柱は各層の木組みとは無関係に独立しており、最上部の相輪を支えている。その洗練された微細な神経の木割と、構造上明解ともい

間を考慮し、金堂には庇型の裳階構造を採用。屋根は重層入母屋とし、瓦に金箔を貼った鴟尾を設け、伽藍の中心的建造物として格調の高いイメージを求めたものである。更に軒を支える部分は塔と同じく三手先斗拱とし、金堂と回廊屋根を切り離すことによって、より奈良時代的な姿を追求した。

講堂

遠江国分寺の講堂址は、昭和二十六年の発掘調査によって、初めてその位置が確認された。基壇の規模は間口九十八尺（二十九・二丈）、奥行六十一尺（十八・一丈）であるが、講堂自体の数値と様式は不明である。

復元に当たっては、法隆寺及び唐招提寺の講堂を参考とし、金堂との関係から単層入母屋根を採用した。

回廊

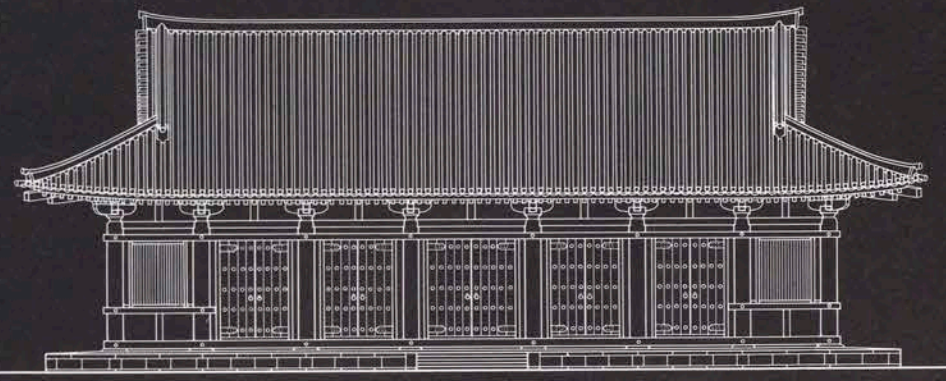
金堂と中門を結ぶ回廊は、遠江国分寺においては、東大寺、大安寺、薬師寺などと同様の複廊である。複廊とは、中央に緑青色の連子窓を連ね、両側を吹放しの通路とした形で、これに対して片側だけが通路となっているものが、法隆寺、四天王寺などにある単廊である。回廊の幅は二十六尺七・七寸、柱間は十尺（三丈）と推定されており、ここでは全体像を法隆寺回廊、柱の様式を唐招提寺金堂から求めた。

中門、土壘、その他

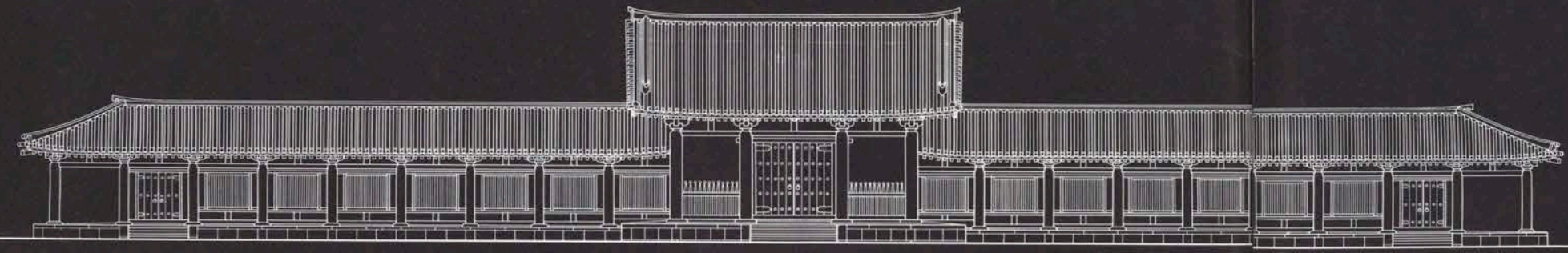
中門は、金堂の南百八十尺の位置にあり、奥行二十六尺、間口が五十六尺程度であろうという以外、何も判明していない。ここでは、単層切妻屋根を持つ、桁行三間柱の八脚門を想定してみたが、その規模は、回廊との関係で相対的に変化することになる。また、中門から更に五十八尺ほど南に南大門があったといわれ、布目瓦の堆積が発見されているが、その規模は全く不明である。但し、当時の様式からみて中門よりは小型であったと推定される。

国分寺の寺域を囲む土壘については、伽藍の西側にかの長さといまも痕跡が残っている。しかし、幅八尺

講堂



中門



0 1 2 3 4 5 10M

える技法は、美しい容姿となって表現されるばかりでなく、耐震構造としても優秀なものである。

七重の塔の高さについては、石田茂作博士により、心柱径五尺六寸の四十倍にあたる二百二十四尺（六十六・五丈）と推定されている。ここでは、その唯一の推定値をもとにプロポーションを求めたものだが、全体として柱間一辺長と全長との比較上、どうしてもバランスが得にくくなる。そのため元興寺五重小塔の例から、相輪部分を長めにするこによって、推定値の範囲内においてできる限り安定性の高い塔の姿を復元したものである。

だが専門家の判断を仰いでも、なお構造上の不安要素が残っており、今後、建築的側面からの検討が求められるところであろう。細部については、相輪の形は当麻寺の西塔を参考とし、軒を支える部分は唐招提寺金堂をモデルに三手先斗拱を採用した。更に、屋根は緩勾配とし、軒先の反りについても、大きな反りは後年のものであることから、緩やかな形を採った。

遠江国分寺の塔は、全体の規模においては東大寺七重の塔の総長百丈には及ばないものの、地方寺院としては稀有の壮大さを有していたことは間違いないところである。

金堂

遠江国分寺の中心に位置する金堂については、法隆寺及び唐招提寺の金堂を参考とした。

判明している数値としては、基壇の間口百十二尺（三十三・三丈）、奥行七十一尺（二十一・一丈）であり、正面に幅十五尺（四・五丈）の石階三段が発見されている。また、金堂自体の規模は、間口七間、奥行四間と想定される。この金堂に関しては、前述のように堂の中心が寺域の中心と合致しているばかりでなく、

金堂基壇奥行二塔基壇対角線
金堂基壇間口二講堂基壇対角線
金堂基壇間口×二回廊東西

といった寸法上の不思議な一致が見られ、伽藍構成における金堂の占める位置は重要であったと思われる。そうした重要性に加え、本尊の丈六仏像を安置する内部空

（一・四丈）から十三尺（三・九丈）もの土壘が、当時、どのような形をしていたかについては、全く想定しがたいものがある。ここでは、官立の国分寺であること、他の堂塔とのバランスから判断して、木板葺きの築地堀の形を復元してみた。こうした遺構のほかにも、未発掘といくつかある。そこでプロジェクトチームは、遠江国分寺で実際に僧たちが生活していた当時の姿をより明らかにするために、数多くの古代寺院を参考としながら、鐘楼、経蔵、僧房、食堂、大湯殿などの不可欠の建造物についても、推定できる限りの復元を試みた。

以上が遠江国分寺の復元概要であるが、これに要する建設費用は、七重の塔が三十四億九千六百万円、金堂は二十七億九千万円、また伽藍全体では百九十九億七千万円と想定している。伽藍全体とは、本誌の配置図に示した全ての建造物であり、木材部は台湾産を使用。細部に関しては、例えば相輪は銅鑄物、漆下地、金箔一度押しの仕様と、往時のままに復元するもので、完成までの工期はほぼ五年と考えられる。

五、作業を終えて

遠江国分寺の復元にあたり、プロジェクトチームのメンバーがもつとも感銘したことは、伽藍における完成しつくされた構成であった。平面上の配列は言うに及ばず、立体上の空間構成の全ての面において、古代人の偉大ともいえる睿智には、いま更ながら驚かばかりである。

国分寺建立の意味については、歴史上まだまだ解明されない部分が多くあり、今後の発掘と研究が待たれるところであるが、千二百年以上もの往古、近代建築にも劣らないこうした建造物が日本各地に建てられたことを知り得ただけでも、今回の復元の目的の多くは達せられたといえるであろう。

復元に当たっては、古代寺院建築の側面からは、このほど建築学会賞を受賞された文化財保護審議会専門委員の福山敏男氏、また国分寺研究の歴史的側面からは、平安博物館館長・角田文衛氏、そして実際の古式寺院建築に携わっておられる立場から、法隆寺大工・西岡常一氏に多大なご協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。